

近世の往来物・書札礼における助数詞の考察

——『女文通宝袋』について——

三保忠夫

はじめに

助数詞とは、数を表わす語彙(数詞)に添え、それがどのような事物(対象)の数量であるかを示す接尾語の一種である。助数詞は、話しことばと書きことばとを問わず、また過去と現在とを問わず、日本語においては、きわめて重要な働きをしているようにみうけられる。

助数詞には、和語系のもの、漢語系のもの、漢語系以外の外来語系のものといった、およそ、三様がある。日本語の推移とともに、昨今、助数詞にも大小の様変わりが認められるが、それでも、主流を占めるのは前二者であろう。和語系助数詞とは、いうまでもなく日本語本来のそれであり、漢語系助数詞とは、漢語文化の渡来に始まるそれである。後者は、従って、これも外来語の一ではあるが、その当初より重用されており、かつ、これが和語系助数詞に与えた

影響も少なくなかったようである。

助数詞の研究は、しかしながら、今日、どれほども進展していないようである。例えば、和語系助数詞、漢語系助数詞といつても、それぞれ、具体的には、一体、どのようなものがあるのか、また、両者の間には、歴史的にはどのような関わり合い(交渉)があったのか、そもそも漢語系助数詞が渡来し、重用されたのはなぜか、それが渡来して後、その性格なり本質なりの変化することはなかったか、総じて、助数詞は、国語生活のどのような世界・ジャンルで、どのように、また、何のために用いられたのか、古代から今日までにおいて、どのような変遷がたどられるのか、ひいては、日本語における助数詞とは、一体、何か、——等々の問題については、未だ十分に解明されていないようにみうけられる。

これまで、筆者は、奈良・平安時代⁽¹⁾、中世⁽²⁾、近世⁽³⁾、また、中国古⁽⁴⁾代、それぞれにおける助数詞について調査・検討してきた。調査は

緒に就いたばかりである。この種の研究は、資料を吟味しながら、より広く、より多くの用例を収集していくことが大切であろう。その資料として重視されるのは、実際に用いられた文書や実録的な日記・記録などである。だが、その他に、故実書や書札札、辞書などの類もまた重要ではなからうか。前者における用例が具体的、現実的存在であるとすれば、後者のそれは抽象的、理想的存在である。あるいは、後者は、可能的、また、規範的存在であるといつてもよいであろう。

本稿では、近世における往来物・書札の内から女文通宝袋、一冊を取り上げ、ここに説かれる助数詞について検討してみたい。近世の往来物といえは、かつては十把ひとからげとされ、軽視される傾向もあつた。ここに取り上げる資料も、さして特異なものではない。しかし、こうした資料にも注目すべき意義のひそんでいることに注意したいのである。

一 資料

「女文通宝袋」題・扉題一冊は、江戸時代、文化十五年二八一八に刊行された町家の若い女性向けの消息手本のようなものである。本資料は、女文通宝箱とも称したのであろうか、序文池田東籬の題目には「女文通宝箱」ともみえる。

「女文通宝箱」との書名々々、甲本というにつき、「国書総目録」・「古

典籍総合目録」によれば、次のようにある。即ち、分類は往来物、著者は西川龍章堂書、成立は文化十五年刊、版本に、慶応義塾大学、神宮文庫図書館（以上は刊年未調査、文化十五年版）玉川大学（絵入女文通宝袋）二冊、実はその後刷り本である、日本大学往来物関係コレクション（女文通宝袋）二冊、その他――東京学芸大学望月文庫（絵入女文通宝袋）二冊がある、とみえる。ここにいう「著者」とは原作者の意ではない。本資料の著者は池田東籬（源東籬、正嗣、麻卿、東籬堂、菊人である。西川龍章堂美暢は、閑斎（龍章堂閑斎と号する御家流の書家である。¹¹⁾

一方、「女文通宝袋」との書名々々、乙本というについては、同じく次のようにある。即ち、別名「女文章大和錦」、分類は往来物、著者は池田東籬亭作、西川龍章堂書、成立は天保六年二八三互刊、版本に、天保六年版――国学院大学、玉川大学（二冊、刊年不明）――東京大学（当本は実は甲本の後刷り本である、東京学芸大学望月文庫、その他――国立国会図書館、国学院大学、石川謙、がある、とみえる。池田東籬亭の名は甲本にもみえる。その序文末に「菊すけ書」とみえる人物がそれであろう。多くの著作や編書がある。

しかし、甲・乙二本は、内容や体裁も異なる別物であり、乙本には、後に述べるような上欄部（書札札）が存しない。

ここに用いる一本（複製は、右の甲本に属するものである。この書誌は次のとおりである。

(1) 外題 「絵入女文通宝袋 全」（原題袋、左扉、双巻、(2) 扉題 「絵入

女文通宝袋（文字は藍色）(3)序首 「女文通宝箱」、(4)柱刻・魚尾

なし、(5)本文 漢字交り平仮名文、平仮名付訓あり、(6)画

あり（彩色なし）(7)寸法 表紙・半紙本、縦二一・四センチ、横一

五・八センチ、題箋匣郭 縦一四・七センチ、横一・九センチ、

本文匣郭・四周単郭 縦一八・三センチ―一八・一センチ、内

上欄分五・二センチ―四・九センチ、横一・九センチ、(8)表

紙 原表紙、色濃紺、菊花等の絵・彩色あり、但し剝落、(9)紙

数 扉頁返し半丁、本文七九丁、刊記半丁（後表紙裏に貼付）(10)扉題

右「龍章堂書」、同左「京撰書林 求好堂合梓」などともに文字

は藍色、

(11)序文末「文化十四年丁丑春 菊すけ書」

(12)絵師「速水春曉齋画」（二丁ウ・二丁オの画）

(13)刊記「執筆 京師 龍章堂美暢」

文化十五年寅正月

浪華書林

柏原屋清右衛門

播磨屋九兵衛

吉野屋仁兵衛

皇都書林

著 屋 宗 八

（破損）錢 屋庄兵衛

(14)旧蔵者印「能美嶋／津久茂／小澤屋」

本資料は、外見上、その本体は消息手本集である。紙面の多く

はこれに費されている。しかし同時に、本資料は書札礼でもある。本文の上欄がこれに充てられている。前者は本欄をもって大書され、後者は欄外をもって細字で記されている。従って、前者が主であり、後者が従のようなだが、言語量としては、また、内容的にも、後者は前者に劣るものではない。

往来物としての本文には、「初春祝儀文」、「同返事」、「若菜の節会の文」、「同かへし文」以下、合計七十二通の消息文が配置されている。初春、節、上巳、参宮、花見、五月雨、納涼、七夕、盆、八朔、重陽、湯治、芝居見物、初雪、年忘、歳暮など、時候のあいさつや年中行事に関わるものが多く、これらに交って、結納、結婚、懐胎、出産、髪置などに関わるもの、また、不幸悔の文などが配されている。全体は、いわゆる散らし書きの仮名消息である。当時の子女は、これらにより、時節時節の消息書き様、ことは遣い、筆遣いなどを学習したものである。

書札礼としての上欄には、「○文ことはつかひ」以下、消息の用語や国語表現諸般に関わる事項についての解説がなされている。その中には、「小笠原折形」(三丁ウ・三四丁ウ)、「封しやうひな形」(七九丁ウ)など、のし袋の種類や書の封じ方の図解もみえている。これらは、中世以来、諸家の手によって著述されている書札礼や故実書に通ずるものがある。

二 対名の事

本資料における書札礼の内に、「対名の事」と題する一条がある。今日の、いわゆる助数詞、および、単位について解説したものである。まず、次に、これを翻字しよう。

(翻字)

- 73(丁)(行) 対名の事
 73才1 鴨一番
 2 鳥の数を一番と
 3 いふことハ祝言の
 4 時ばかり用ゆる也
 5 つねにハ一羽二羽
 6 と云べし
 7 鷹白鳥の類
 8 ミな同し
 9 生鯛 一折
 10 一掛 又二尾
 73ウ1 とも書べし
 2 干鯛 一箱
 3 又ハ何枚とも書べし
 4

- 5 鯉節 一連
 6 又二節とも書
 7 鮭 一本
 8 又一尺とも書
 9 煎海草 一桁
 74才1 鯧串貝 一連
 2 又一箱と書
 3 鷹之鳥と云ハ
 4 雉子にかきる也
 5 外ハ
 6 鷹の厂
 7 鷹の鴨といふ
 8 鷹の鶉 一竿
 9 七ツより多きを書(ママ)
 10 七ツよりすくなきは
 74ウ1 一串といふ
 2 羅紗 金欄 天
 3 鶯絨 紗綾 綸
 4 子 縮縮 此類を
 5 其余の絹布ハ
 6 一疋二疋といふ

- 76才1 香ハ 一炷と書
- 9 鏡ハ 一面と云
- 8 あるひハ 一樽
- 7 酒 何荷
- 6 但し五十本也
- 5 針 壹疋
- 4 百錢を十疋といふ
- 3 鳥目 百疋といふ
- 2 壹枚四拾三匁也
- 75ウ1 銀子 何枚
- 9 金壹歩 百疋と云
- 8 の小判七兩二分也
- 7 金一枚といふハ今
- 6 金子 壹枚
- 5 團扇 一柄
- 4 扇子 一折
- 3 或ハ 一抱 又ハ百抱
- 2 綿 何抱(把か)
- 75才1 帶ハ 一筋二筋
- 8 袴ハ 一行と云
- 7 絹糸 一丸

- 77ウ1 鞠 一顆
- 7 銚子 一柄
- 6 錫 一對
- 5 盃台 一面
- 4 香盆 一枚
- 3 香爐 一ツ
- 2 懸物 一幅
- 76ウ1 白銀ハ 壹歩
- ~ (餅つきの挿絵あり)
- 4 蒸ハ 一壺
- 3 伽羅ハ 一斤
- 2 蒸ハ 一壺
- 77才1 又一足ともいふ
- 2 琴。琵琶 一面
- 3 和琴 一間
- 4 笛 一管といふ
- 5 簫 一管といふ
- 6 太鼓 一筒 又一枝とも
- 7 鼓 大小とも 一張といふ
- 8 花瓶 二瓶
- 77ウ1 花瓶 二瓶
- 2 花入 同

- 3 茶碗 茶入
 4 建水 各一ツ二ツ
 5 茶水器 茶巾
 6 帛 各同し
 7 茶笕 一箇
 8 又老書ともいふ
 78才 1 柄杓 同しく
 2 墨。蠟燭 一挺
 3 筆 一對、二一
 4 屏風 一双、二一
 5 脇息 一脚
 6 机 床几 同しく
 7 鍋釜 一口といふ
 78ウ 1 奉書と書べからず
 2 ほう書ハ紙の名に
 3 あらず
 4 奉書紙
 5 杉原紙 何帖
 6 と書へし何束
 7 とハかくべからず
 8 道明寺 一袋

- 9 と書へからず
 10 道明寺引飯と
 11 かくべし
 12 此たぐひあまた有
 13 なべてしるべし

右は、助数詞、および、単位につき、ことさら一項をもつて解説したものである。標題の「対名」とは、数量表現の対象となる物事と、それを対象として用いられる助数詞および、単位との間に対偶関係のあるところからの称呼と解される。このことばにつき、今日、適切に解説したものを知らないが、ホフマンの日本語文典に、次のような言及がある。

これらの部類の一覧表は日本のある百科事典に、対名 *Tsui-miyau* (すなわち、対、または、対等なものを表わす名稱) という見出しで取り上げているが、この名称はこれらの語の特徴を極めて正しく表わしたものである。(8)

本書の第一版は、一八六七年(慶応三年)に公刊されている。「これらの部類の」、「これらの語の」とは、ほぼ、助数詞に相当する語群をさす。この直前には、「対象物をその外観から考えて、その注目すべき特徴の一つ、または外の特徴に従つて数えるのである。(中略) こうして、品物をいくつかの部類に分けることになり」とある。助数詞の本質に関わる発言もみられるが、「対名」とは、「対、または、

対等なものを表わす名称」であり、これは、そうした助数詞の「特徴を極めて正しく表わしたものと評価されている。

なお、ホフマンによれば、「これらの部類の一覽表」を「対名という見出し」のもとに掲出する「日本のある百科事典」があるというが、残念ながらこれについては未勘である。

三 本資料の助数詞の性格

本資料における助数詞には、今日、既に見られなくなった種類や用法もみえているようである。時代、社会、文化など、すべてが大きく異なる現在であれば、これは当然のことというべきであろうか。

ところが、これらの中には、当時の書札札を見渡しても容易に見出せないものがある。右にみる助数詞とは、どういう性格のものであるか。どのような場でどのように用いられたものであるか。

助数詞について、右のような「解説」をもつ書札札としては左記があげられる。こうした資料を見出していくのは、目下、手探りに近い状態である。未だ十分なものではないが、現時点で知り得たところとして列挙しよう。依拠した資料、その版本、書誌、掲出された助数詞の詳細、その拠つてきたところ（典拠や資料相互の影響関係（類縁性、その他）について説明すべきことが多々あるが、紙面の都合上、これらは別稿に譲らせていただきたい。

資料	成立・刊行年代	助数詞のみえる主要項目
① 書札調法記	元禄八年（二六九五）刊	衣服并魚鳥詞づかひ（他）
② 文林節用筆海往来	享保四年（二七一九）刊	物の数書様之事（他）
③ 永代重宝記	元禄八年（二六九五）成、天明七年（二七八七）増補	数量門
④ 万物用文章	安永年間（安永元年・一七七二）成	対名字□（他）
⑤ 御家書札大成	弘化二年（一八四五）跋	都て物の員をしるすに心得の事（他）
⑥ 永代節用無尽蔵	寛延三年（二七五〇）元刻、宝暦二年（二七五二）・天保二年（一八三一）等に刊	数量（イ部・ヒ部）
⑦ 札式書札集	延宝三年（二六七五）刊	物の数書様（他）
⑧ 字林用文章宝蔵	安永八年（二七七九）刊	目録調やう、諸物異名

この内、①から⑥までの資料には、比較的多くの用例がみえてい
る。また、⑥は、辞書、節用集の一種とみられる。これを例外とす
れば、他の九点は、いわゆる往来物と称されるものである。往来物
とはいっても、こうした助数詞についての解説が行われるのは、そ
の書札としての部分においてのことである。この点は、本資料の
場合と同様である。書札札においては、助数詞について、ことさら
言及することがあったということになろう。これは顕著な傾向とい
ってよい。^⑩

書札札と助数詞との関係につき、注意しておきたいのは、それぞ
れにおいて助数詞を掲げ、解説する場合の、その項目名である。こ
れには、おおよそ、次の二様がある。

- (i) 「……詞づかひ」、「対名字□」、「諸物異名」、「数量門」など
としてみえるもの——①③④⑥⑧
- (ii) 「物の数書様之事」、「都て物の員をしるすに心得の事」、「物
数書法」、「目錄調やう」などとしてみえるもの——②⑤⑦⑧⑨

⑩
前者は、一般的に、助数詞の用法について説く形であり、後者は、
員数の書き方（書記方法）の心得としてそれについて説くものである。

前者は、一見、「書く」ことにこだわらないかのようにみえる。だ
が、それが書札札においてのことであれば、やはり、後者と軌を一
にするものであろう。助数詞は、従って、「書く」世界、それも相手
に対して発信される文書の世界と非常に関わり深いものということ
になってこよう。「文書」とは、古文書において、「差出人の意志を
充名人に伝達するために、差出人が文章を用いて作成したものと規
定することができる」とされる。^⑩ 日常的な記録や日記、勉学の場の
訓読や聞き書き、随筆や物語、その他、書く世界も様々であるが、助
数詞は、まず、文書のこととしての性格が色濃く認められはしな
いだらうか。

さて、本資料における助数詞の性格を窺うため、右の資料十点と
比較してみる（別表参照）。

資料十点における助数詞は、それぞれ多寡があり、それぞれの間
に出入りもある。だが、この十点を総合すれば、江戸時代における
助数詞のかなりのところが収集できよう、また、この枠から大きく
はみ出す資料は、まず、ないのではないかと推測される。書札札
以外なら、なおさらのことであろう。^⑩

ところが、本資料の場合、それらとの相違が大きいのである。

(6)、また、(5)・(4)にみるところがそれである。比較の規準や視点を細かく設定し、比較資料を限定していけば、さらに多くの相違点が出てくるかもしれない。

本資料では、なぜ、相違点が目立つのか、その答えは、これが女性用の書札礼であるということにあるのではなからうか。助数詞の用法として示されているその対象物を見ると、例えば、弓矢、太刀、脇差、兜、鎧などの武具類、馬具類、また、烏帽子、直衣(直垂)、狩衣、立付、肩衣等の男性用衣裳などが見当らない。たとえ、武家向け、あるいは、上流階層向けの書札礼でなくても、一般向けのものではあれば、そうした物品の数え方は、ひととおりの学習目標として掲げておかねばならないであろう。その一般が男性中心社会を意味するとしても、やはり、同じことである。

それらに代って目に付くのは、衣裳類や糸織品、薰香、進物用品、食品、台所用品、裁縫用具、茶道用具、華道用具、音曲・芸事の用具、筆墨紙、家具、金銭などである。花瓶、花入、脇息、鍋釜、茶筌、柄杓、茶碗、茶入、建水、茶水器、茶巾、帛、針、絹糸、香盆などは、小品ながら女性の日常生活、また、そのたしなみに関わる現実的、具体的な品々である。

つまり、本資料は、男性社会でなく、女性社会の側に成立しているため、右の如き状況を呈するのではないかと考えられるのである。

四 注意される用例

他資料に見出しにくい助数詞の「口」がある。鍋・釜に用いる「口(口)」は、実は、奈良・平安時代の古文書や中世の辞書類などにもみえている。近世の書言字考節用集にもみえる。従って、鍋・釜に「口」を用いるのは、当時、ふつうのことであったと考えられる。しかし、近世の書札礼で、この用法を示したものは、目下、見当らない。偶然のことか、あるいは、さほど重要でなかったためか、わからない。そうした「口」の用法を、本資料は説いているのであり、ここに、その性格の一端が示されているようにみうけられる。

「箇」については、書言字考節用集に「一箇一箇鼓」(卷十、数量門「二」の条とみえるところが参照される。単に物を数える助数詞ではなからう。書言字考節用集の用例も、本資料によってより深く解釈していくことができそうである。

「対」は二ヶ所にみえている。「墨墨 蠟燭蠟燭 一挺」に続く「筆筆 一對、二一」と、「盃台盃台 一面」と「鏡子鏡子 一柄」との間に位置する「錫錫 一對」との二例である。前者は問題がない。後者は、酒徳利酒徳利 (の類) 一對を意味するものとみられる。これにつき、日葡辞書の「Susu スズ錫」の条には、「また、酒を入れるのに使う錫製の徳利、あるいは、筒形の瓶」とある。関連する用例として左記がある。

○ 抑(中略来、食籠・錫物一對携之、太刀黒・式百疋折柄進上之、

(実隆公記、大永八年(二五八)三月九日)

○ 御上御前へ御盃参候時、ス、ノ物一對進上候。チホ持参候。(石

山本願寺日記、天文十二年(二五四)正月四日)

○ 錫一對進入候寸信計候、錫一對を或ハ双瓶兩瓶など、不重宝記大全、下巻、

七、元禄四年(二六九)刊)

酒徳利やびんなどを「すず」というのは、今日の各地の方言にもみられるようである。

助数詞の「対」は、中世では、画(三幅三幅)、絵賛、筆・日本のペン、酒の徳利、剃刀など、「その他これらと同類の、対をなしている多くの物を数える言い方」(日葡辞書、Itegui の条)であり、近世の書札札、その他では、筆、行器、装束、花瓶等がその対象となっている。

○ 又へいし一對口をてふ花がたにつ、みて被し置候也。(春公覚悟之事、宝町時代)

○ 銚子提子 一對(道照懲察、天文頃(十六世紀中葉)成す)

ロドリゲスの日本大文典(邦訳)には、

Itegui (一対)、『袋』(Ye)、『筆』(Fude)、『瓶』(Bin)、『鈴』(Suzu)。

とみえるが、末尾の「鈴」は「錫」と翻字すべきものである。餿頭屋本節用集には「鈴具錫瓶」(守部、財)とみえる。

「疋」は、日葡辞書・補遺「Ippiqi の条」に「Papeis de agulhas」とみえるところが参照される。この語釈は「未詳」とされているが、本資料に「針 疋疋 / 但し五十本也」とみえるところを勘案すれば、やはり、針の紙包み(縫針五十本入り)の意ではなからうか。

「丸」につき、日葡辞書・補遺、Fionan の条には、「糸になつている絹、絹の屑糸、綿、紙、およびそれらと同類の物など、物の或る量や重さを数える言い方」とある。ここには、助数詞としての場合と重さの単位の場合とが混在しているのであろうか。即ち、助数詞としての「丸」は、珠玉(法隆寺伽藍起并流記寶財帳、延喜式、鞠(書簡故実、書札訓法記、他)、丸薬(実隆公記、他)、紙十束(ロドリゲス・日本大文典)などを数える場合に用いる。単位としてのそれは、絲(日本の斤で八貫七十五目、三十五斤、糸唐の斤で五十八斤、五十目)、砂糖・山帰来・薬など(二〇〇斤を計量する場合に用いるとし(ロドリゲス・日本大文典、これに関しては、「のべ鼻紙九百丸」(西鶴・好色一代男、巻八)、「銅五拾丸(但拾貫目人也)」(万葉集手紙巻などの例がある。本資料の場合は、絹糸を計量するものであるから後者としての用例となる。従つて、これは助数詞ではないが、当時の、文字に表われる機会の少ない、しかも、女性の側の表現として貴重な用例とならう。

他資料と比較して、助数詞の表記(漢字)が相違するものに「筒」がある。これは、御家書札大成に「太鼓 一柄」とみえるところと同語異表記の関係にあるものであろう。とすれば、いろは字に「一柄

茶臼」とあるところが参照される。臼には柄杓（柄杓）が付いていて、これを握って挽くことになる。柄のある、あるいは、柄の長い用具は「柄」で数えられる。「二柄」とは、茶臼そのものを数えた助数詞であらう。転じては、それを古い挽（巻）く回数（巻）、また、それによつて挽（巻）いた量をも意味することがあつたかもしれない。同様にみていけば、

太鼓には桴（桴）が用いられる。「二柄」とは、その桴（桴）一本、または、二本を、

あるいは、その打ち方なり一打ちの音なりを意味したのであらうか。

しかし、今の資料には「筒」の字が用いられている。これを思うに、

「太鼓一筒」とは、太鼓胴体の方そのものの数え方ではなからうか。書言字考節用集では、巻十、数量門の「一」の条に、「一柄（柄）又（又）云（云）一本（一本）、又（又）柄長刀（柄長刀）」とあり、これに四語へだてた次の行に「一柄（柄）太鼓（太鼓）」とある。ここでは「柄」とのよみ方で掲出されているが、ことさら分けて掲げているのは、前者と後者とでは、「柄」の用法が異なるからであらう。書札調法記元禄八年刊本には「太鼓一から」とみえる。

本資料における助数詞には、他資料近世書札札になかなか見出せないものも多い。「間（間）」和琴（和琴）、「箇（箇）」茶筌（茶筌）、柄杓（柄杓）、「書（書）」同上、「つ」建木（建木）、茶巾（茶巾）、他など、ことにそうではなからうか。未だ他をもつて検証できないものもある。それらが女性に関わつてのことであるとすれば、なおさら注目されよう。しかし、他資料に見出せないのは、それが、当時、希少の存在であつたからではなく、文字資料としては残りにくい存在であつたからであらう。また、同様の書札札にはみえない

のに、遡つて中世の辞書類、故実書類などにみえるものもあるが、これらでも特別なものとは限らない。日葡辞書やロドリゲスの日本大文典などに通ずるのも、むしろ、現実的、日常的な助数詞であつたからではなからうか。

むすび

本稿では、女文通宝袋、一冊を取り上げ、その書札札にみえる助数詞について検討した。他の書札札のそれと比較すれば、ここには多少趣を異にする助数詞がみえている。これは、本資料が女性のために作成されているところからのことと考えられる。これらの助数詞は、当時の女性が日常的に用いたものとして注目されるのである。女性の側のことは、どうしても文字や記録には残りにくかつたと思われる。その内容を明かにするのは難しいことかもしれないが、その一部でも部分でも、これらを求めて積み重ねていけば、やがてはかなりのことが判明してくるのではなからうか。

また、助数詞にも女性特有の用法のあらうことは、前稿においても窺うことができた。男性と女性、あるいは、武士と町人、さらには、農・工・商の各層各職種等により、助数詞用法にもそれぞれ特徴のあらうことが推測される。今後には、各種の古文書や古記録、簿籍類や文芸作品などを通してそうした問題に取り組んでいかねばならない。往来物や書札札に説くところ、実際に行われていると

ころとの比較検討も必要であろう。

書札が、故実書や作法書と関わりあるものならば、これにも流儀なり流派なりがあるかもしれない。流儀や流派それぞれの考え方が、ことばの面にはどのように反映されているか、就中、助数詞の用法上、考え方や対処の方法に相違点はないか、これらも興味深い問題である。

近世の往来物、書札の総合的研究も、そろそろ始められてよいかと思う。本資料のような往来物が、その中においてどのように位置付けられるか、これも今後に残された課題の一である。

なお、先には、助数詞は、書く世界と非常に関わりが深いと述べた。しかし、助数詞は、また、口頭語の世界にもよく用いられている。口頭語における助数詞は、それ相應の性格を有しているようである。方言の問題、口頭語と文章語との問題なども併せ、今後の検討課題の一としたい。(一九九二・一二・三〇草)

注

(1) 拙稿「古文書における助数詞(一)」、「島根大学教育学部紀要」、第三卷第一号、一九八九年七月。(同)(二)、「同」(一)、同二号、同年二月。「奈良時代の寺院縁起資財帳における助数詞の考察」、「古代語の構造と展開」(和泉書院所収、一九九二年六月)。

(2) 拙稿「中世辞書類における助数詞について」、「鎌倉時代語研究」(武蔵野書院、第一六輯所収、一九九三年)。

(3) 拙稿「西鶴作品における助数詞について」、「島大國文」、第二二号、一九九三年。

(4) 拙稿「居延簡牘資料における量詞の考察」、「島根大学教育学部紀要」、第二四卷第二号、一九九〇年二月。「中国古代墓葬出土簡牘資料における量詞の考察」、「同」(一)、第二五卷、一九九一年二月。「トルファン墓葬出土文書における量詞の考察」、「同」(一)、第二六卷、一九九二年二月。「敦煌簡牘資料における量詞の考察」、「島大國文」、第一九号、一九九〇年一月。「吐魯番出土文書」における量詞について、「同」(一)、第二〇号、一九九一年二月。

(5) 三次市立図書館蔵孝行往来一冊には、題言に「天保六(一八三五)未のとし極月 西川美暢題」とあり、巻末に「上略龍章堂 七十一翁書之」とみえる。

(6) 現広島県安芸郡江田島町津久茂、元村長小澤保次氏所用。円形墨印、径三センチ。

(7) 「日本国語大辞典」(小学館)、「広辞苑」(岩波書店)、「大辞林」(三省堂)、「大字典」(講談社)、「大漢和辞典」(大修館書店)および、「古事類苑」(吉川弘文館)などには「対名」の見出し語(項目)がみられない。

(8) 三沢光博訳「ホフマン日本語文典」、一九六八年六月、明治書院刊、二〇〇頁。

(9) この「名称」との語は、その「名」字を直訳したもので厳密な用語ではなからう。

(10) 助数詞についての解説や言及をもたない書札礼(二書として、また、その内の一部でもあるが、こうした形でことさら言及する傾向は、辞書類、および、故実書類の他には例がないらしい。

(11) 日本歴史学会編「概説古文書学 古代・中世編」、一九八三年五月、吉川弘文館、序説、一頁。

(12) 試みに、井原西鶴の諸作品の場合と比較してみても、おおむねはこの範囲に終始するようである。注(3)文献参照。

(13) 土井忠生・森田武・長南実編訳「邦訳日葡辞書」、一九八〇年五月、岩波書店、五九三頁右。なお、原文には、Suzu(鐘)に Estanho, ou calaim. の語釈がある(亀井孝解題「日葡辞書」、一九七三年五月、勉誠社、一三三頁オ右)。「calaim」はインド産の錫で、欧州産のよりも純良なもの」とされる(「邦訳日葡辞書」)。

(14) 一九五七年三月、統群書類従完成会。

(15) 上松寅三編纂校訂、下巻、一九六六年五月復刻版、清文堂出版株式会社。

(16) 「近世文学資料類従 参考文献編10」、一九七五年三月、勉

誠社。

(17) 武家奉公に関する故実書。「群書類従」、第三輯、四六五頁。

(18) 伊勢流の武家故実札法書。「統群書類従」、第二四輯下、一七二七頁。

(19) 土井忠生訳注、一九五五年三月初版、一九六九年九月四版、三省堂、七九六頁。

(20) 実隆公記や近世の文芸作品などに「鈴」字を用いた例もあるが、宛字であろう。なお、「Isso. Yim. y. (一又)」の条にみえる「鈴」についても同様である。

(21) 注(13)亀井「日葡辞書」、三三七頁オ右。直訳すると、針(縫針)の紙となる。

(22) 注(13)文献、三三七頁右には、「1)未詳。針の紙包みの意か。日西辞書には、Papeles de agujas と直訳してあり、日仏辞書はこの条を脱している」とある。

(23) 注(13)文献、二四八頁右。

(24) 注(1)文献、「古文書」(一)。

(25) 卷一五、内蔵寮、「^{新訂}増補国史大系」、四二九頁。

(26) 「統群書類従」、第二四輯下、四九七頁。

(27) 明応五年(二四九六)九月十日、注(14)文献。

(28) 注(19)文献、七七九頁。

(29) この場合、助数詞との区別がはっきりしないが、しばらくこ

のままとしておく。

(30) 注(19) 文献、七七九頁。

(31) 『日本古典文学大系 西鶴集上』、二二三頁。ここでは紙一丸は五十斤とされる。

(32) 注(16)、『参考文献編6』、一九七六年五月、三一〇頁。

(33) 島根大学教育学部国語学研究室蔵本、五六丁オ。

(34) 歌舞伎の蝶々子梅菊(三)に、「なんのお前、彼奴等が去んだとて、三から位の白は、わし一人で沢山でござります」(鶴屋南北全集、第二巻、一九七四年二月、三二書房、四一四頁)とみえるのはこの例であろうか。この白は、春米屋の春白である。

【別表】 他資料(書札礼)との比較

○ 他資料(書札礼)を①②③……の番号で示す。

○ 見出しは歴史的仮名遣いによる。

○ ×印は「単位」に関するもの。

○ /印の下は右に示した主要項目以外に所見する用例を意味する。

(1) 他資料と同様の用法にあるとみられるもの(小差のある場合には△印を付す)

〈本資料〉〈対象〉 | 〈他資料の場合〉

掛 △生鯛 | / ② (鯛) :: 参考「懸」魚⑥

脚斤 × 机、床几 | ①②③⑤⑥⑧
伽羅 | ①⑤

申 鷹の鴉・七ツよりすくなきは | ①⑤
鞠 | ①⑤

管 笛 | ①②③④⑤⑥ / ⑧⑨
双 屏風 | ①②③⑤⑥⑨

竿 鷹の鴉・七ツより多きを | ①⑤
尺 鮭 | ②③④⑤⑨

筋 帯 | ①④⑤
束 △奉書紙・杉原紙(には書かない) | ②③⑥ (以上・紙)

足 鞠 | ③④⑥ / ⑧
樽 酒 | / ②⑧

挺 墨、蠟燭 | ①②③⑤⑥ / ⑦⑧
つ 鷹の鴉・七ツより多きを・七ツよりすくなきは | ①②⑤⑥

つ 香炉 | ①⑤
番 鴨、鳥の数〔祝言の時〕 | ①②⑤⑥ / ①②⑤⑨

対 筆 | ①③⑤⑥ / ⑧
帖 △奉書紙・杉原紙(に書く) | ②③⑥ / ⑦⑧ (以上・紙)

② (杉原紙)

抱(把) 綿 ①④⑤/②⑦

羽 鳥の数、馬・白鳥の類 ①②③④⑤⑥/②⑨

箱 干鯛 ……参考「筥」⑤(筥にいたるを)

×正 金 ②

×正 鳥目 ②

×歩 金 ②

幅 懸物 ①⑤

袋 道明寺 ②

枚 干鯛 ①/①

枚 金子 ②/①②⑨

枚 銀子 ②③/⑨

枚 香盆 ①⑤

卷 △羅紗、金襴、天鵞絨、紗綾、綸子、縮緬 ①④⑤、但し
その内の羅紗は「間」を用いる(①④⑤)

面 鏡 ③④⑥

面 盃台 ①⑤

面 琵琶 ①④/⑧⑨

連 盤節 ⑨

連 鯛、串貝 ①⑤/②⑨

折 △生鯛 ①⑤/②⑦⑧ (以上・鯛、/⑤⑨ (以上
・干鯛)

(2) 助数詞の対象につき、その表現は異なるが、同様の用法に
あるとみられるもの(右に準ずるもの)

〔本資料〕〈対象〉 一〔他資料の場合〕

荷 酒 一樽(①)、樽ニツ(⑨)、御樽(②⑤)、
御たる(⑧)、家内喜多留(②)

管 簞 一筥・篋築(⑤)

桁 煎海鼠 一串海鼠(①⑤)

×正 其余(羅紗、金襴、天鵞絨、紗綾、綸子、縮緬、以外)
の絹布 一羽二重、郡内嶋、縮、紬、奥嶋、曝、
木綿、布子(①)、他

瓶 花瓶、花入 一花(②③⑥)、立花(⑨)

本 鮭 一鮓、雪魚、鱒、他(①④⑤など)

折 扇子 一台にのせたるを(①⑤)、紙(⑥/⑧)

(3) 助数詞のよみ方が相違するもの

〔本資料〕〈対象〉 一〔他資料の場合〕

柄 団扇 一〔柄〕団扇(①⑤)、一〔柄〕扇(②③⑥)、
一〔柄〕扇(⑨)

壺 蕉 一〔壺〕(①⑤)

炷 香 一〔炷〕(①③⑤⑥)、一〔炷〕(②⑥)

尾 生鯛 一〔尾〕魚(④)、一〔尾〕鯛(⑤)

(4) 助数詞の表記(漢字)が相違するもの

〔本資料〕〈対象〉 | (他資料の場合)

筒太鼓 | 「柄」太鼓(⑤)、「から」太鼓(①)
張鼓・大小 | 「丁」琴、鼓(①⑤)、鼓(④)、鼓(⑧)
∴参考「張」箏(⑧)

(5) 助数詞のよみ方も表記(漢字)も相違するもの

〔本資料〕〈対象〉 | (他資料の場合)

柄銚子 | 「枝」銚子(①⑤)
∴参考「柄」長刀(②⑥)

行袴 | 「領」袴、袈裟、鎧(⑥)、「対」袴(②③⑨)、「襲」袴類(④)、革袴(①⑤)
∴参考「行」状(③)

面琴 | 「丁」琴(①⑤)

(6) 他資料に見出しにくい助数詞、または、その用法が見出しにくいもの

〔本資料〕〈対象〉 | (他資料の場合)

脚脇息 | | (不見) ∴参考机、案、床几に
「脚」を用いた例はある

口鍋、釜 | | (不見) ∴参考鞍、鎧、轡、切付、

間和琴 | | (不見) ∴参考羅紗、羅背板等に
は×「間」を用いる

笛茶筌、柄杓 | | (不見)

枝茶筌、柄杓 | | (不見)

書茶筌、柄杓 | | (不見)

つ茶碗、茶入、建水、茶水器、茶巾、帛 | | (不見)

対錫 | | (不見) ∴参考千鯛に「箱」を用
いた例はある

箱錫、串貝 | | (不見)

正針 | | (不見)

節鯉節 | | (不見) ∴参考「つ」鯉節(②⑨)、
「連」鯉節(⑨)

本針 | | (不見) ∴参考鎚、木、策、扇に
「本」を用いた例はある

丸絹糸 | | (不見) ∴参考「丸」鞠(①②③)
(⑤)